



会長に指名されて

佐々保雄

このたび、この伝統あり、かつ輝かしい山歴の会員を多数擁する日本山岳会の会長を仰せつかまつりました。

西堀前会長から、最初にこのお話がございました時、この私が、何で、と驚き、かつ困惑致しました。本会の会長という名譽もさることながら、その重責を担うには、私は全く相応わしくないと存じましたからです。

願いますと、ご存知のように、本会は明治三十八年(一九〇五)に創立されましたが、しばらくは、その理由は詳らかにしません。昭和三十六年(一九六一)に初めて、会創立発起人の一人、小島鳥水さんが初代の会長になられまして、爾来、代々の会長は何れも、登山

1981年(昭和56年)
8月号(No. 434)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目次

会長に指名されて	
佐々保雄	(1)
英国隊のクングール峰初登頂	(2)
五月連休の穂高岳(下)	
折井健一	(3)
図書紹介	(3)
「日本登山大系 槍ヶ岳・穂高岳」	
「The Last Step」「誰れでも行ける	
楽しいヒマラヤ」「ランタン・リルン」	
想うこと二題	
麻生武治	(6)
東西南北	(5)
尾瀬スキーツアーでのビバーク	
三水会便り	
わたし達の日韓交流登山	
自然保護情報	(7)
お知らせ	(8)
第14回山岳図書交換会	
(図書委員会)	(9)
報告	(8)
北海道支部・自然保護委・図書委	
会務報告・ルーム日誌・会員移動	(10)
図書受入報告(図書委員会)	(10)
カット/松本(慎)・吉阪(隆)・宮下(啓)	

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時



総会後懇親会での佐々新会長(左)と西堀前会長
/撮影 羽田栄治

の實踐においても、文筆活動においても、刮目すべき業績を残された立派な方々でした。それを、何の目ぼしい登山歴とてなく、ただ山好きな一介の学究に過ぎない私が、これら先達の後をうけつこう

とは夢にも思わぬことでした。会員の皆さんにおかれても意外に思われ、佐々って誰だい、ということでないかと思えます。

それで、私は到底その器でないこと、また会の運営についても、内部事情についても殆んど何も知らないことを申し上げ、くり返し御辞退致した次第であります。会には多士齊々、素晴らしき登山記

録で知られた方々や、岳界に貢献らしい方々が、綺麗星のごとくおられます。それに比べますと、私などは昭和五年(一九三〇)学校を終えますとすぐ、その年に創設されました北大の理学部に参り、定年まで四〇年を札幌で過しました。従って、会に何の寄与するところとてなく、また会の多くの方々にお近づきになる機会も少ないまま、今日に到りました。その間、国の内外の山々も多少は訪ねましたが、何れも山旅といったほどのものに過ぎません。

こうして私が、お奨めによってお引受けすることになりましたのは、これからの会の発展には、いろいろ方策があるが、特に支部の強化が重点であること、そのために、地方会員歴の長い君の力を貸してほしいとお話があったからでした。また、日本山岳会の創立当初の精神を生かして、科学的、文化的な雰囲気を感じて、科学的、文化的な発言もありました。日本には、三人寄れば山岳会と言う言葉があるほど、山の会が数えきれぬほどあります。その多くは、学校とか、職域とか、地域でまとまった会で、日本山岳会ほど、歴史の古いこともありませんが、全国的で、かつ層の厚い会はありません。その割合はよく存じませんが、少くともその半ばは地方におられます。私もずっと、今申し上げましたように、札幌におりましたので、地方会員の心持が、判っているような気が致します。それで、西堀前会長のお話に動かされ、使命を感じて、この大役、或いは大厄かも知れませんが、これをお引受けする気になった次第です。

考えますと、山登りは極めて多様な面を持ってあります。尖鋭的な、岩と水の世界での激しい登攀から、森や河、花や鳥を訪ねての山歩きまで。また、国の内外を問わず到る所の山々を対象として、老若男女、その好みと体力に応じ

山をきれいに「三」は持ち帰ろう

て、いろいろの山行があります。また精神の充足を求めて、或いはスポーツ的な技を競い、さらに科学的な探求にまで、山の秘めるあらゆる面を味わうことが出来ます。そこに自然の極美としての山を、破壊や汚染から守ろうとする自然愛護の思想も生れてくるわけでしょう。こうして、山のもつ自然を愛し、それを通じて得る喜びとともに傾ち合うのが山岳会なのではないかと思ひます。

登山界は今や内外を挙げてその流れが大きく変わろうとしているかに見受けられます。ヒマラヤを始め諸大陸の高い峰は概ねその頂が踏まれ、共産圏の山々も解放され始めました。変わったルートを求め、厳冬季を選び、新しい技術でという一方、機器に頼らず、また無酸素でといった気運もあり、さらに出来るだけ、下積みをつくらず、共に苦労した仲間登頂の喜びを頒ち合うといった傾向も出始めております。

一方、登山は、いわゆるレクリエーションとして、世に広く拡がりつつあり、同時に著しく商業化され始めて、登山人口は日々増加しつつあります。また装備の進歩や、アプローチの便宜さから、誰でも山に入り易くなり、それと同時に犠牲者も急増していることは見逃せません。

こうした流れの中にあつて、私たちの日本山岳会は、どうあるべきか、その舵を誤たまぬようにすべき時機にあると存じます。特に本会のように、あらゆる型の登山者を擁する会にあつては、また地方会員の多い方とあつては、その在り方は容易に決め得ぬことと思われます。しかし、従来の自由を尊ぶとぶ気風を土台に、めいめいが本会を自分の会として、よい会にしようという心持ちと努力があれば、自から会は在るべき方に進んで行くことでしょう。

幸いに本会には、若い会員がかなり増えつつありますので、その方たちの新鮮な思考と知性と体力に期待したいと思います。また経験豊かな先輩たちには、こうした若い人々の動きを暖かい目で見守ると共に、時に鞭撻もあつて然るべきでしょう。こうして共に伝統にあぐらをかくことなく、前進的であり、平衡のとれた会であるよう、私は願うものであります。

近年、会には多くの研究委員会も設けられ、多くの面で登山界における指導的な役割を果しておりますが、この方面の一層の活躍こそ、本会を特色づける望ましいものと存じます。

ふり返りますと、私が本会に入会致しましたのは、大正十五年(一九二五)、十八歳の時でした。まだ高校の三年でしたが、先輩の木暮理太郎(元本会々長)さんや沼井鉄太郎(元理事)さんの、是

英国隊のクングール峰初登頂

「アルパイン・スタイルによる二万五千以上の初登頂」として中国のクングール峰(七、七一九)の登頂に成功した英国隊が、帰国の途路の七月末、日本で報告会を開いた。

同隊の主催者はエベレスト記念財団、香港ベイスのジャーディン・マセソン社後援、総経費は昨年の偵察行と合わせ十八万。隊の構成は隊長にマイケル・ワード博士(五十四歳、一九六三年エベレスト初登頂時の医師)。登はん隊はクリス・ポニントン(四十五歳、七〇年アンナプルナ南壁、七五年エベレスト南西壁各初登頂の隊長)をリーダーに、ジョー・タスカ(三十二歳、七九年カンチエンジュンガ北稜初登頂)、ピーター・ボードマン(三十歳、エベレスト南西壁、カンチエンジュンガ北稜各初登頂)、アラン・ラウス(二十九歳、七九年ヌプツェ北壁初登頂)の四人、科学班はワード博士のほか、エドワード・ウイリアム(五十七歳)、ジェームス・ミレッジ(五十歳)、チャールズ・クラーク(三十六歳)の四人。このほか通訳、カメラマンの計十人。中国側は七人。

六月上旬、クングール峰南西のкокセル氷河四、七五〇にB C、五、四〇〇にA B C。第一次攻撃は南稜ルートから行われたが、最終岩峰直下の七、二〇〇地点で放棄したが、昨年偵察の結果、二日間の登頂を計画したが、読みの甘さを認め、また、雪崩の危険と予想外の悪天候のためテントは不安定、雪洞に切りかえた、ポニントンは語っている。

第二次隊は七月四日、南西稜ルートを採用してスタート。五日A B C、六日六、四五〇に

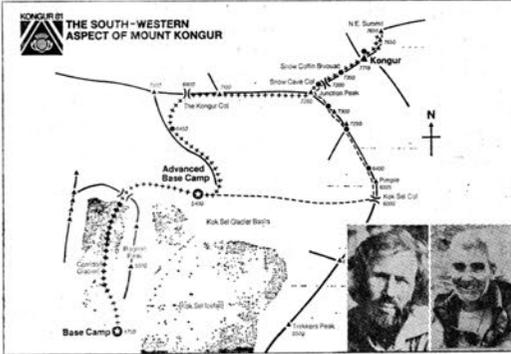
雪洞(以後テントは使用せず)、七日休養、八日岩峰(約五〇〇)起部に。雪洞は積雪一層足らずで雪洞の居住性は不快極まるものながら、悪天候のため三日間停滞。

十二日の快晴、強風のなかを岩峰に取り組み、二百の登はんは五時間を要する苦闘から、午後八時登頂。北京時間、午後十一時まで行動可能とのこと。その日頂上直下十に雪洞構築。十三日「外を見ると、さらに高いピークを発見、悔いを千載に残しては」(ラウス)と、北東峰の登頂にも足を進めた(実際は十二日登頂のピークが主峰)。

科学調査(主に高所医学)についてワード博士は「この連中は、血液の酸素移動のシステムが、平地の人間よりもすぐれている」と述べ、この研究をさらに進める。アルパイン・スタイルについてはラウスはその万能説を、またタスカは、ポラーとのかね合いで臨機応変説と、年齢差をうかがわせていた。

(片山全平)

ルート図およびワード登山隊長(写真右)とポニントン登はん隊長(写真左)



非入れとのお奨めで、会員にして頂きました。その時の「これから君たち若い連中によってもらわなくては」とのお言葉が、今なお耳に残っております。しかし実際は、長らく北国住いというこ

で、今日まで何のお手伝いも出来ずにおり、心苦しく思っております。今回それが、この年齢になって、図らずも、このような形で、会のために尽す機会を与えられようとは。何か因縁といったものを感じ、お二人の大先輩に報ゆるためにも、シッカリやらねばと存じております。

今のところ、ご指名を受けてから日も浅く、特に抱負といったことを申し上げる時ではございませぬが、会員であることが楽しく、

五月連休の穂高岳(下)

折井 健 一

私は穂高山荘へ向かい、喘ぎながらザイテングラートに沿って直登した。歩運びは次第、次第に遅くなるばかり。時折り、奥穂高岳側の岩壁から風の誘発と思われる雪崩の音が気味悪くガスの中から聞えて、沢筋にも一条、二条流下していた。壁寄りに一列に並んで休止中のパーティが小さい雪崩にリュックを流されて大あわてを

していた。この程度の雪崩では生命に別条はないだろうが、君子危きに近寄らずである。なるべくザ

かつ誇りに思えるような会を、というのが何よりの望みでございませぬ。

幸いに副会長の田口さん、渡辺さんのお二人には、本部の事情に暗い私を助けて、お働き頂けるとのことでございますし、また前会長方のご指導や、理事・評議員・監事の方々のご協力も頂ける由ですので、まことに心強く、勇気を

得ております。会はもとより会員一同のものであり、役員はヴォランティアとして会のお世話をするのが勤めですが、皆さんと共に、今申し上げたような会としての発展をと所存致しております。何卒よろしく願ひ上げます。

イテングラート寄りに登るべきだ。

若者が三人元気に脇を通り過ぎて登って行く。そのパーティに穂高岳山荘への言付けをたのんだ。ガスの中から二人の若者が迎えに来てくれた。リュックサックを渡すに急に身が軽くなって、今までの喘ぎが嘘のように思われた。

ハンディトーカーはガスの中の山荘と連絡していた。

「折井さん見つかりました」「同行何人ですか」「いや独りです」「老



日本登山大系(全十巻)
槍ヶ岳・穂高岳
柏瀬ほか編

全国の山岳の主要な岩場のガイドブックとして編集されたものでその第一回配本が「槍ヶ岳・穂高岳」である。岩登りを好む若いクライマー向きに作られたユニークな内容で、本の作りもなかなかスマートである。

ざっと眼を通したところ、各岩場の登攀史めいた記事に、かなり杜撰(ずさん)なことが書かれているので、気の付いたものについて触れておきたい。また参考文献としてあげてあるものも、戦前の文献は全く無視され、「岳人」、「山と渓谷」、「岩と雪」のバックナンバーが出て

いるのはうなずけない。たとえば屏風岩一ルンゼの小川兄弟の初登の記録は当然「山岳」二十六年三号が出てなければならぬのだが、それがない。執筆者は「山岳」など読んだことがないのであるうか。「笠ヶ岳の岩場と沢」のところ、笠ヶ岳

の積雪期の記録として、昭和三年法大を最初としたり、ウエストンの登山を明治二十七年六月としてある。いずれも誤りで、「前穂高東面」では松高の初登について何もなく、Dフエースの田山ルートの登攀者の名前も違う。「滝谷」ではチーム中央稜、クラック尾根の初登の記録が正確に記されておらず、「槍ヶ岳の岩場」では、何の説明もなく、北鎌尾根の学習院と早稲田の初登争いといった表現もおかしい。また「赤沢山の岩場」では「わずかに昭和の初め東京農大の河内氏が針峰付近に登った」との記録を見ること出来る」とかたずけている

が、これも不勉強だ。この記録は農大部報「ネーベルメーヤ」創刊号に河内嘉吉氏が「赤沢岳猫耳の登攀」として報告しており、「山と雪」第四号(昭和六年一月発行)にも同氏がルート図を付して詳しく述べている。

ガイドブックなのだから、危ふやな登攀史めいた記事は抜きにしたほうがすっきりしたのであるまいか。こうしたミスは編集者の責任でもあろう。

一流出版社の発行物だけに、あえて苦言を呈したのだが、何かの機会に訂正してほしいものである。それにしても、いまのクライマーはここに載っているようなルート図を片手に岩登りしているの

であろうか。まことにあげない思いがする。昭和五十五年八月、白水社刊。二六一ページ、写真、付図多数、定価二五〇〇円(山崎安治)

The Last Step
The American
Ascent of K2
by RICK RIDGEWAY

本書は一九七八年、K2北東稜からアブルジ稜にトラバースし、九月六日、七日の両日、二隊四名があい次いで無酸素の登頂に成功したときの登山記である。

一読した感想は冒険登山としてまことに面白いドキュメンタリーというところである。しかしこの登山を統制あるわが国のそれと比較すると、いささか奇異な印象を受けてしまう。二隊四名が登頂、生還できたのも併せてあったとの感が深い。

隊長J・ホイッテカーは前回七五年隊の隊長でもあった。当初人工衛星の写真から中国側からのアプローチを考え、許可が得られず、パキスタン政府と交渉の結果、ボニントンK2隊の一カ月後に出発との条件付で許可を得る。

隊員選定は七五年隊の経験から二〇、〇〇〇以上の経験者であり、性格の判っているこ

人の独り歩きは危険だと言って下さい」と英雄君の声が聞えた。

雨と風の吹きさらしの山荘前で、英雄君と神君が待っていて、出迎えてくれた(十五時半)。

横尾山荘から丁度八時間かかったことになる。矢張り年には勝てないというのが実感であった。

山荘には顔なじみの岐阜県警のTさん外の方々も、この連休の遭難警備に登っていた。大変ご苦労なことだと思ふ。事故の無いことを祈るばかりである。

窓から真正面に笠岳の見える部屋に落ちていた。冷えた体にとどん炬燵の暖かさが心地よくぬむ気を誘う。布団も乾燥していて気が良いし、昔の山小屋の湿った冷たさのイメージは全くない。昔を知っている者にとっては贅沢な気がしないでもない。

またこの山荘の特有な風車は調子よく発電して灯火はもちろん、炊事場でも温水が思うがままに使

用出来る。それなりに重大郎さんと後を継いだ英雄君との二代にわたる苦心と工夫の賜物である。

四日、窓から明け方の笠岳の姿が眼に入った。雲海の上に浮かび、素晴らしい。雲海が次第に晴れ上がって、白山がいつもより高く見えた。まだ風は強そうで、風車の音がブンブンうなりを立てて今朝も元氣一杯である。

奥穂高岳頂上への登り口では多勢の登山者がハシゴの順番待ちを
している。真夏の最盛期と同じようである。
正午、昼食をとっている最中に緊急連絡が入った。前穂で岳沢に滑落事故発生とのこと。食卓を共にしていた長野県山岳警備隊のKさん外一名は気の毒に箸を置いて飛び出して行った。
午後から風が静かになったので、洞沢岳の頂まで登る。今日は遠くの山々まで良く見えて心が豊かになるのを覚えた。頂上近くの岩陰の日溜りは春の日射しが暖かで、思わぬ長居をしてしまった。
夕方から紺碧の空が増々ひろがり笠岳の肩に日が沈む頃は、山稜を真赤に染めた。荘厳な日没である。こんな景色を炬燵にあたりながら眺められるというのも贅沢な限りである。昨年八月は同じこの部屋で三日間ついに笠岳の姿も見られずに仲間と語らい過ぎた。その日のことを思い、今日はここまで登ってよかったと思つた。
五日、穂高岳山荘(七時二十分)を出て登った道を下山した。ザイテングラートの末端まで山荘の若い人が送ってくれた。寒冷前線通過のため雪面が固く凍り付いてアイゼンが欲しいくらいで、久しぶりにピッケルを使った。
澄んだ青空の下で、洞沢をとりまく山の稜線がくっきりと美しい。何枚も写真を撮った。洞沢の幕営地は撤収に大童のパーティが多い。山積するゴミの処理が気に

と、また人誰かが登頂するため非常に苦勞を100パーセント約束することが義務Vであるとした。かくて隊長以下十四名が決定するが、そのなかに二組の夫婦と一人の未亡人、つまり女性三名と男性十一名が構成人員となる。
六月下旬、キャラバン開始、七月はじめのBC、七月半ばのC IIIまでは順調に進んでゆくが、八月はじめのC IV建設のころから隊員間の軋轢が芽生え、派閥がではじめる。山行を共にした者同志の仲間意識、登頂者になりたいたい強い欲望、それに婦人関係が絡み合ったようである。まず登頂者と見られる四人のAチーム、これに負けずに登頂したい二人(内女性一名)とその支持者たちのBチームの区分がしだいに明らかになり、口論もはじまり、婦人との close friendship とか、果ては cuckolded husband などの言葉が出てくる。
やがてこのA、Bの争いが八月末の朝爆発する。C IIIからC IVへ出発しようとするBチームがC IVのAチームから無線連絡で阻止されるためにおきた誤解からである。Bチームの一人は、これからの固定綱を切り、テントを焼いてしまふと怒りだす。これは宥められるが、図書紹介

BCに下り、再度登らない。読者として、隊の運用は一体どうなっているのか、たいへん心配である。
しかし、しだいに態勢が整い、C V建設は、A、B両チームがまがりなりに協力して進められる。C Vから、Aチームのリジウエイ、ロスケリーの二名は北東稜をダイレクトに、途中C VIを建て頂上へ、ウィックワイヤー、ライヒアルトの二名はアブルツジ稜にトランプスしてC VI建設後、頂上へと二手に分かれる。アブルツジ稜隊は日本隊のC VIの七〇〇以下にC VIを建て、六日登頂する。ウィックワイヤーはその夜C VIに帰れずビークする。ダイレクト隊は雪崩の危険のため、アブルツジ稜へ移動、七日登頂する。この四人はC Vからはば支援なしで荷を負いC VIを設営して登頂するのであるから、その体力、精神力は驚くべきものがある。
登攀の描写、隊員間の会話などは著者の筆力であろうか。またカラコラムの戦術として、酸素についての議論は興味深い。
本文三〇一ページ、写真三二ページ、寸法二六五×一八五ミリ、Published by The Mountaineer 719 Pike Street, Seattle, Washington 98108
価格約五千元 (今村正二)

誰でも行ける 楽しいヒマラヤ 佐藤テラ共著 大河原由紀子 著
十数年前からヒマラヤへのトレッキングが盛んになり行く人々も年を増すこととふえ、一度ならず二度、三度行ったという人もいるのに、適当な案内書がなく、あちこちかけずり回って本を集めたり、情報をきき歩いてやっと出発というありさまであった。
本書は、それらをすべて含んでおり一冊あれば苦勞することなく出かけられる、ヒマラヤ(ネパール)トレッキングの案内書であり入門書でもある。
一九八〇年に七十五歳の高齢で初めて、しかも単身でネパールに行かれ、三カ月間滞在され、いろいろ経験されたこと、調べられたことなど、女性らしい細かな心くばりが隅々までゆきわたっている。帰国されてすぐ一年もたたない、あつという間に書かれたその精力的な活動力に頭が下がる。
また、共著者の大河原由紀子さんは、十年近く御主人と共にカトマンズの旅行業界に活躍しておられ、翔んでいる女性のデットの結果である。
内容は第一部にネパールの地理から始まり、人種と言葉、宗教と教養、トレッキングの準

かかった。本谷合合から岩小屋辺まで、登りは気にもとめずに通った河床の雪道が二箇所大きく割れていたので、左岸夏道を少し辿り、再び河床におりた。山は寒いといっても五月の湯気では三、四日のうちに山麓ではこんなに雪融けが早い。この調子ならば上高地

の平の雪融けはもっと早いだろう。嘉門次小屋で休憩。輝夫君の出してくれた濃い日本茶がうまかった。連休も終わり、汐の引いたようにまた静かになった道を自分の足音を聞きながら河童橋に向かった。(昭和五十六年五月七日)

尾瀬スキーツアーでの

ピバーク

山口一孝



今年五月二日のスキー山行は、久しく忘れていた山の厳しさを思い出させてくれた。

私たち一行二十八名は尾瀬の春スキーに出掛けたのだが、三平峠から大清水平、血伏山を経て富士見峠に向かったところ、白尾山頂付近(約二千)で濃霧にまかれ

現在地の判定がつかなくなった。午後六時ころだった。シユプールをたどって引返し、血伏山・白尾山の南東側(推定高度千八百)の原生林で二十五名がピバークし、リーダー他二名は連絡のため下山した。

私はピバーク組のリーダーを命ぜられ、身のひき締まる思いで、残った二十五名(男十五、女十)と救助されるまで頑張ることを誓い合った。全員結束し、盛大な焚

火と乏しい食料、歌声で夜を徹した。この際たき木を集めること以外、できるだけエネルギーの消耗を防ぎ、ピバーク即遭難と思いつんで沈滞しがちな気分を解放に努めた。歌声と一人の発案による祈りが最も役に立った。私がドイツやロシアの民謡を歌い、男性群がメキシコ民謡やラマルセイエーズ、さらにソーラン節など数々の日本民謡を歌い続け、段々と気分を盛り上げ、やがて女性群がこれに唱和しはじめた時、私はしめたと考えた。「あと四時間が夜が明ける」と私が皆を励ましたとき、一人のクリスチャンと思われる女性が「連絡に行った三人の無事を皆で祈りましょう」と提案した。他人をさし置いても自分だけは生き残ろうと

備、注意など、買物のしかた、服装、と細々記されている。第二部はバスボートの取得、交通事情、郵便、通貨。第三部はホテル、食事、美容院の場所まで書き込んであり、市内の地図も添えてある。第四部はトレッキングコース、ハイキングコースをA(初心者向き)、B(中級者向き)、C(登山経験者向き)とわけてコースの紹介が記されている。安心して手軽に出掛けられるよう、参考になる内容が盛り沢山の本である。全国図書館協会選定一新樹社 定価二五〇〇円(斎藤かつら)

ランタン・リルン

七二四六

大阪市立大学山岳会

一九六一年春、故森本嘉一氏のリーダーシップのもとに開始されたランタン・リルン・エクスペディションは、日本人のヒマラヤにおける最初の遭難(氷河雪崩事故)という不運に巡りあわせたが、この遠征は森本・大島両氏と共にサーダーのギャルツェン・ノルブの死によって幕を閉じることになった。それ以来一九七八年秋の登頂に至る

いたゲスの一人もいないという確信はあったが、二十五名全員無事生還を祈りたい気持ちで一杯だっ

大阪市大山岳会の苦闘の記録が本書である。内容としては、一九七八年の初登頂の記録、そこに至る経過、各担当部門の報告、研究、資料、その他である。各項目はそれぞれ興味深い内容を持ち、隊の経験が詳しく述べられ、時には登頂ルートに関する意見の対立なども率直に語られており、高所登山に関心の深い人たちの興味を引くことであろう。それらの中で、和田城志による、ランタン・リルンの登頂ルートについて、タクティクス論、ザイルシャフト―シェルパー―などはなかなかの好編である。またこの遠征は雪崩事故に始まったいきさつもあり、雪崩に関しては大変詳しい報告されている。特に片岡泰彦のリルン氷河の雪崩については、モンズン末期の新雪崩を二週間観測した記録およびその他の雪崩報告であるが、評者はかつてこの種の詳細な報告を眼にしたことがない。片岡氏はその後ひどい高度障害により、撤退せざるを得なかったことが惜しまれる。本書には以上のような内容が、豊富な図・表・写真を併用して展開されているのであるが、多少の

「もう大丈夫」と激励を続けては

瑕瑾がない訳ではない。例えば文章中に図表の所在頁を示さないと、図表番号が誤って引用されるなどは、ありふれた誤植と違って、読者に大変な面倒を強いることになる。同じ内容の行動表が二カ所にあり、しかも内容が少し違っていたりすると、豊富な資料がかえって混乱の元になったりする。またブロック雪崩とかブロック崩壊という言葉が出てくるが、これらは氷河雪崩に違いあるまいと見当をつけるまでに結構時間がかかるのである。一九七八年の第三次隊に参加した人たちが、仲間うちの記念として残す記録ならば、このような欠点は問題にもされないで済むかも知れないが、定価をつけて販売する本ならば、もう少し編集に意を用いて、読みやすくしてほしかった。しかしそうした欠点を超えて優れた内容を持つ本書は、若い、特に実践的な登山者に一読を薦めたい。昭和五十五年十月二十四日 大阪市立大学山岳会発行(大阪市淀川区塚本一―一五―二七)ダイヤモンド電機内) B 五判 一九四頁 定価三五〇〇円 (金坂一郎)

いたものの、雨の恐ろしさを思い、雨の降りそうな天候でも雨という言葉を出せなかった。雨にな

らなかつたのは神の御加護とでもいう他はない。それはこのように祈りあって始めて与えられるものと思う。クリスチャンではない自然科学者としての私の思考理念からすれば、仏教に魅力を感じず迷える小羊ではあるが、祈りと救いの間に理念的な因果関係が把握されようとされまいと、そんなことは私には問題外だった。

五月三日、午前三時四十分、上

想うこと二題

麻生武治

不二に想う

厳冬のエヴェレスト登頂を試みる人さえある現今、夏山季節来たるなど申すと毫碌呼ばわりされるでしょうが、火山岩崩落で多数の死傷者さえ出した富士登山について私見を述べさせて頂く。

アイスピッケル、シユタイグアイゼン等を操作してアイステヒニークを練習するのは別として、一夏に万余の人が登頂する三千級級の山は世界中不二山だけですよ。話が脱線きみだがアルプスと呼んでPLAYGROUND of EUROPEとした著者の LES-LIE STEPHEN にあやかれれば

ってくる救助隊を迎えることができた。強力なヘッドランプの光が二つ三つとスラロームで樹間をぬって近づいてくる。正しく救いの光われらを照らさせた。全員歓声を上げる。光が涙のにじむ目の中で滝のように流れている。讃美歌の「久しく待ちにし主はきませり」という歌を口ずさんだ。

その朝無事だった連絡隊の三名と再会できた喜びは生涯忘れられ



インドの鈴

夏季の登頂を含む富士山地域は日本国民の遊歩場である。たしか国立公園の看板もかかっているはず。ああそれなのに不潔と非衛生な印象を残すのが現状である。汚物臭い風が吹降してくるし、眼には散乱する空缶の山。

百年河清を待つに等し、非難こき下しはナンセンスだからそれより前向きに一步進めて：あれだけ大衆性のある場所なんだからケーブルよしロープウェイよし。機械化輸送をはかるのが適切でしょう。小島久太さんと辻二郎さんの間で論争のあった機械化運輸の可否、あれは半世紀以上も昔のこと。御両氏とも既

ない。私は風薫る五月の尾瀬といった軽い気持で、ボンチョもオーバーズボンも宿に残したまま山に向かったことを反省している。濃霧で視界なく、刻々と暮れてゆく白い山稜の恐しさは冬山そのものであった。

反省すべきことばかりの我々だったが、皆の心が一つにまとまって祈ったことだけは神の御加護に値したのであらう。

越後の山と地酒の旅

三水会便り

三水会では昨年来、越後の山と地酒の旅を計画しておりましたが、地元在住の片岡会員に相談しましたところ、四月下旬なら残雪の山と幻の銘酒にありつけるとの耳よりの話。その上、国鉄の山の家まで利用させていただけることとなった。

山と酒ならという面々が集ったのは四月二十五日、午前九時上野駅。すでに当番会員が一時間前に来て、自由席を確保。わざわざ指定席をとった会員までも合流して賑やかな旅とはなった。汽車が新津駅にすべりこむと、片岡氏を始めとして、新潟鉄道管理局山岳連盟OB会の森谷会長、同米田理事長他の皆さんのお出迎えを受け、早速マイクロボスにて

北方文化博物館豪農の館(旧大地主伊藤家)を視察させていた。次に今度の旅の第一目的たる幻の銘酒「越の寒梅」の醸造元の石本社長邸を訪ねる。奥座敷でお茶をいただき、苔むす大庭園を拜見。それではと招き入れられた二間続きの大広間の卓上には幻の銘酒が現実となって林立している。数々の山海の料理のおもてなしに恐縮する。先程の正座の脚がいつしか崩れる。石本氏(明大山岳部OB)からはなお硝子製のグイ飲み一ケずつに自ら漢詩の一句を彫りつけた記念品を頂戴する。その後、冬になると何万羽となく飛来する大白鳥の姿が消えた漂湖を見学。岸辺の桜だけは満開だった。

そしていよいよ東赤谷の国鉄の山の家に向かう。遙かに望む越後の山々はまだたっぷりと白雪を残している。国鉄山の家は鉄骨二階建、丈余の降雪にもビクともしない構造。これが皆トンネル掘削の折の廃材利用とのこと。調理場、洗面所、風呂場が付設されている。

さて、その夜の歓迎会はこの日記すには紙面が足りない。幻の銘酒は勿論、秘酒等あり、流石の三水会の連中も、盛り沢山の山海の幸と共に心からの満足感を味わったのであった。そこへ斎藤越後支部長とその会員の方々が参加され、饗応されたにはお礼の言葉もない。

明朝は起床五時、出発は六時とあって、ぬかりなく用意しておいて下さった温い布団の中に潜り込んだのは十時だった。眼が覚めると、無風快晴。昨夜の飲み過ぎも忘れて、白銀を踏んで雄羅出発。焼峰山頂に着いたのは午前九時。山頂からの白雪の越後の山々の遠望は印象的だった。帰路には滑落停止やグリセードの練習をしたりしたが、予定より約一時間早く全員無事帰着する。

それからは昨夜の歓迎宴に劣らぬ大パーティーとなった。お別れに際して、国鉄山岳会員が苦心の末集められた「越の寒梅」をお土産に頂戴して、マイクロボスの人となった。終りに本紙上をお借りして、石本、森谷、米田の三氏、斎藤越後支部長、その他協力下さった方々および片岡さんに心からお礼申し上げます。(斎藤健治)

参加者 斎藤健治、高田真哉、荒野康子、原謙一、小林由美子、宮城恭一、進藤波男、入沢郁夫、島田翼、富田郁夫、山崎直人、坂倉登喜子、片岡博、中保、岩堀瑞子、木島英一(以上申込受付順) わたし達の 日韓交流登山 金山 淳二 会報四月号、理事会審議事項で日韓交流登山計画が諒承された。

に他界されてるが、私はよく存知あげていたからというが、両方とも仲々の粹人だったが思想や立場が異るとあまで対立するものかな。富士山の登山鉄道といえは終戦後間もなくの頃、甲州財閥若尾光太郎氏名義で輸送機関敷設の申請があったのだが、県だか運輸省だかそれは聞き漏らしたが却下された。

その理由は山梨側でやれば静岡側もたまっちゃいまい。そうなるといよいよよって山頂一帯が俗化するとかが反対理由だそう。俗化云々は極めて曖昧な表現だ、軒なみ登山客の呼び込みが大童な休憩、宿泊、土産店の建ちならぶ風景は浅草六区みたいなものだ。各登山口合わせて幾軒あるか知らないが、彼等の合同企業で運送機関を敷設運営すれば算盤にのるだろうし、衛生面でお山は浄化されるというものだ。ましてや剣ヶ峯の気象観測所はヘリやブルの輸送力とは比較にならぬほど利益になるだろう。日本の冠たる土木工学技術をもつてすれば距離はもとより斜度といひ難問はあるまい。登山最盛期の岩石崩落遭難事故を防ぐためにも隧道式ロープウェイの敷設を望むものです。

マロリーの足跡を想う
今さらヒラリー、テンジン両氏

の世界最高峰初登頂にケチをつけるなんて毛頭考えもしないし、私はそんな柄ではない。話は単にたまたま私のニュージランド滞在中の今年正月十四日、クライストチャーチの朝刊紙 The Press の記事を紹介するまでである。すなわち William Everest now yield up his shoes? の語の訳は読者の御自由でありマロリー、アーヴィン両氏の亡霊が出るのか消えるのか新聞紙面にはいずとも同じのセンセーションな見出しが眼についた。ここで第三次(一九二四年)英国登攀隊の動きを記すのも無駄なこと

で、当時マロリー、アーヴィン両氏の後を追って第六キャンプに到達していたオデル氏は、旧臘来日して我が山岳会では講演もされており皆さん先刻御承知の筈。ただ、ザ・プレッス紙の言わんとするのはマロリー氏が一九二四年六月八日のあの時、登攀経験の浅いアーヴィンと別れて単独登頂し、下降時の事故死説にある。なお北米マサチューセッツ市在住のトム・ホルツェル氏(四十歳)はテレビ、ラジオ技術者であり、元氣な登山家でもあり、今夏登頂を目的とせずマロリー氏の足跡をたどって北東稜に現地踏査を試むとの記事も読んだ。

それに関し、私達の昨年行ったそのミニ版を紹介しよう。
長岡市山岳連盟加盟団体の一つ長岡残雪クラブ、長谷川勝平、田辺信幸、金内恵子の三名が昨年一月、以前からの文通仲間の関係で韓国雪嶺山岳会三名に迎えられ、京城市内見物後、一週間ほど厳寒の土旺城瀑偵察、雪岳山(一七〇八m)登頂、仁寿峰登攀を行って来た。昨年は暖冬で目指す王旺城



韓国西南部の島にある山/吉阪隆正

が下りるらしい。それでその時のメンバーを招待することになった。
八月一日、新潟空港、長岡とやって来た。二日、三日は長岡祭で名物三尺玉花火が揚るので、それを見物。登山用具を整え、憧れの槍・穂高へまず案内した。クライミングは自分達だけの力で、どの希望から案内は横尾あたりまで。おぼつかない日本語で槍・穂高を縦走、滝谷尾根も二、三本攀じ、ついで屏風岩雲稜ルートも、取付き点を指示されただけで、彼ら自身結構楽しんで来たようだ。

日本の岩場グレードは韓国ものに比べ、少し易しいようだが、

自然保護情報

環境週間北海道大会に参加して

自然保護委員会



カット・宮下啓三

北海道自然保護団体連合(代表井手寅夫氏)日本山岳会)主催の昭和五十六年度環境週間行事に、当委員会からは織内委員長、工藤(自然保護協会)、渡辺の三名が参加した。
テーマは「守ろう地球の未来、生かせ環境」というのであるが、道連合が我々に参加を要請した理由の中には、前から当委員会でも

検討している日高横断道路建設予定地を、視察して欲しいと言うこともあった。
六月七日午前十時、元環境庁長官大石武一氏と工藤、渡辺は千歳空港で、さきに道入りしていた織内委員長や道連合の人々と合流し、休憩する間もなく直ちに日高に向かった。
視察は静内側で行われた。現地

岩が脆く、ガラガラで危険だ、との感想だった。
登攀後はまたこちらの案内で残雪クラブの土合合宿に合流した。しかし昨夏はお盆頃の天候悪く、一ノ倉も一緒に登れなかったのは残念であった。
それからまた長岡へ来て遊び、帰途は神戸で知人と会ったり、京都・奈良を見物、大阪から帰国した。
なお、韓国雪嶺山岳会のメンバーは文英成、李贊鏞、金永洙、権徳均、鄭昌述の五名で、先般四十三ページの報告書が送られて来たが読めない。私は山行には参加していない為念。(八一年六月)

を見ながら、既に出来上っている林道の将来の三倍幅になろうという拡幅や、そのさき延びる道路や隧道工事による自然破壊、巨額な税金を使用する工事の是非、将来に及ぼす影響等、色々な意見が出されたが、中でも元長官大石氏の「利権屋のための仕事だ」との発言には、道連合の人々の顔がほころんだ。

その夜は北海道自治会館で、約二〇〇名の参会者を得て、大石氏、中村芳男氏（初代全国自然保護連合理事長）と、当委員長織内氏の講演があった。

大石氏は、尾瀬から水俣病までの広い環境行政の話を読まれたのち、中村氏は北海道の自然はこれ以上破壊してはならないと話した。

織内委員長は、本州のスパラルイン、南アルプススーパー林道を始めとした山岳道路の現状から、日高道路反対を述べられたのち、登山者による山の汚染に言及し、マッキンレー、ネパールの日本登山者の残置ゴミの例をあげ、道路反対も大切だが、登山者も自らの襟を正さなくてはならないと結ばれた。

六月八日は舞台を道東に移し、斜里から根北峠を越え、標津町の誇る標準湿原を見物し、望郷ライン建設として問題になっている風蓮湖東岸のアカエゾマツの茂る砂丘を視察し、当夜は根室グラウンド

ホテルで再び講演会が行われた。明けて六月九日は、開発が進みかけている霧多布湿原、釧路湿原を視察して全行程を終り釧路空港に向かったが、仲々意義のある三日間であった。

昨年から約束では、当会からはもっと大勢の参加者が日高山脈の現状を見ることになっていったが参加者が少なく残念であった。

なお我々を入れ代りに、北海道入りをした環境審による「日高山脈えりも国定公園」指定のための現地調査が、十一日から雨をつい

報告

北海道支部総会報告

北海道支部総会は、五月三十日、札幌フジヤ・サンタス・ホテルで開かれ、昭和五十五年度事業報告、収支決算承認。昭和五十六年度事業計画、収支予算案が承認され、引き続き支部役員を選任、左のように決まった。

支部委員	兼平治水 七〇〇五
(副支部長)	山川 力 七四九一
(副支部長)	辻井達一 七〇三三
自然保護	新妻 徹 五八六八
企画	高沢光雄 五三〇八
記録	石井忠雅 八一四三
記録	浅利欣吉 五三三九
集會	柳田涼子 七七九七
集會	松沢節夫 八三三六
集會	亀井秀子 八四八六

て始められた。―六月十九日― (渡辺正臣)

上高地山研へ!!

今年の開所が豪雪のため遅れ来所人員の出足が例年より少なくなっております。

上高地もこれから落ち着いた雰囲気となりますので皆様お友達をお誘いのうえ大いにご利用下さい。

なお申し込みは直接山研(02395-5633)へご連絡下さい。山研運営委員会 鈴木

集會

三浦勝幸 八五二二
平野 明 五三六八
横江一郎 四〇四七
監事 金井五郎 七一八六
○新年度事業計画
八月二十七日～三十日
カムイエクウチカウシ山、支部山行、東北道集會、帯広地区

九月十二日 観月会
十二月十二日 忘年会
二月下旬～三月上旬
ニセコスキーパー

本年六月下旬、スプリ発行等の日程を決め、引き続き行われた懇親会は、第十四代日本山岳会々長に就任された佐々新会長始め大塚支部長以下三十二名が出席。
二次会、三次会と白夜が明けけるまで、支部総会、五月夜宴の一コマであった。

キノコ狩り

山行 集會委員会

初秋の越後の山でキノコ狩り山行を越後支部の御協力により行ないます。キノコ狩りは始めての試みですが、多数のご参加をお待ちしております。

日時 十月三日(土)～四日(日)
予定 二日夜 東京発(バス)
三日朝 新津より、三川村、上川村周辺
泊。
四日 東蒲、上川村樺目
貫(ボウメキ)、御

ビールパーティ

お知らせ

婦人懇談会

今夏のビールパーティは次のとおりです。皆様のおいでをお待ちいたします。

日時 九月四日(金) 午後六時
三〇分より
場所 日本山岳会ルーム
会費 一五〇〇円

お知らせ

支部設立十周年記念

御岳山登山の案内

前々遊窟、夜帰京。費用 二万円(宿泊三食付・バス代その他)

参加申し込みは、山岳会事務局までお願い致します。

お知らせ

期日 昭和五十六年十月十日
(祝)十一月(日)
場所 御岳山

一昨春秋、爆発以来登山が禁止されていましたが、今年から頂上まで解禁になりました。御岳山も飛騨は静かで、秋色もよく深まる頃です。是非御来遊下さい。

参加費 一三〇〇円(飛騨小坂から湯河温泉までのバス往復、宿泊・懇親会費)

集合 十月十日午後二時二十五分 国鉄高山線飛騨小坂駅
申込先 〒503-13 岐阜県養老郡養老町中157 高木泰夫宛
参加費同封の上、
九月二十日までに申込むこと。

今年もまた上高地山研で逢いましょう!!

△出席者・順不同▽佐々保雄、亀井秀子、辻井達一、一原有徳、小

野肇、松沢節夫、淡川舜平、渡部盛夫、横江一郎、大塚武、加藤正

第14回

山岳図書交換会

図書委員会



今年の図書委員会主催の山岳図書交換会は十月二十四日(土)午後二時から本会ルームで行われることになった。多数会員の参加をお待ちしている。

この交換会の始まりは、向井ビル時代、当時の松方会長の提案で行われたもので、開催日が迫ると小林義正、深田久弥といったそうそうたる図書委員会のメンバーが顔をそろえ、熱心に値段を付けたり、当日の会場の受け付けをやられていたことが、まだきのうのことのように思い出される。

これはと思う山の本は最近めっきり少なくなったし、古書展などにでもネタ違いのラベルが浴えられていた。こうしたアンバランスな関係を少しでも減らそうと図書委員会は動いているのだが、なかなか思うようにいかないのが現状である。引越

しなどでお手持ちの山の本や雑誌、あるいは重複本を処分したいという方はご遠慮なく、図書委員会へ申し出ていただきたい。古本屋へ売るよりもこの交換会へ出品された方が有利である。

最近の交換会の問題はマンネリ化してきていることで、参加者の顔振れが決まってしまっているため、一般には珍しい山の本も、ときどき売れ残るようなことがある。まことにもったいない。この点は何とか考慮したいが、新しい会員が出席されれば解決するよう思う。山岳図書に関心のある方は遠慮なくどしどし顔を出していただきたい。

なお、この交換会について、ご意見、御希望のある方はご連絡いただければ幸いです。

(山崎安治)

已、金井五郎、平野明、新妻徹、横田春雄、井後幸太郎、兼平治水、及川敬一、野田四郎、芳賀孝郎、石井忠雅、小林年、阿部淳、朝比奈英三、石崎貞子、浅原健蔵、末岡陸、山崎勝巳、高沢光雄、中野武司。

自然保護懇親山行

青木ヶ原の

地底を探る

五月二十三日朝、新宿から二台の車に分乗した一行は、まず河口湖にある富士ビジターセンターに立ち寄り自然保護委員らしく富士の地学、動植物等を勉強しさらにこの周辺の旧蹟を見て回る。なにしろこの周辺は今回のリーダー渡辺さんがガイドマップを書いている所だから誠に至れり尽せりである。今日の泊りは正面に富士、ふり返れば目の前に毛無山がそそり立つ農大富士分場の貸切小屋。夕食は富士を仰ぎ見て屋外バーベキュー。一人前一抱えもある大皿には肉、鱈、野菜の山。とても食べきれないで大分残してしまった。この大サービスは織内農大理事のカオらしい。

さて翌二十四日、焼間ヶ原を五所に車を置いて、樹林帯のこの登山道をしぼらく歩く。十五分くらい歩いたらうか。右手下に無気味

な洞穴が現われる。溶岩洞穴の富士風穴だ。今日は前方の富士に登るのでなく、この洞穴へ降りるのである。ヘルメットをかぶり、アイゼンを着けピッケルを握る。井戸を何倍かにした程度の狭い穴を垂直な下降。鍾乳洞と違って真黒な溶岩洞だから小さなヘッドライトはあまり役に立たない。光が真黒な岩に吸収されてしまい反射して来ないのだ。十五分くらい下った頃アイゼンのツアックが氷の感触を伝える。下りきったゆるい傾斜の広い洞穴でほとと息ついてあたりを見回すと、一面に蒼い氷田だ。さらに体を折り曲げて岩をくぐり抜けるごとに、ツララが現われ氷柱が立派になる。この洞穴がどこまで続くのか知らないが、一七〇m地点の立派な氷柱を中心に入れて記念写真をとりにここから引返す。帰りは緩斜面をアイゼンをかきかせて快適な登り。

今回の計画は朝霧高原にある農大分場に一泊して何処か山に登ろうという織内さんの提案が実ったもので、毛無山が近いから登ろうという話もあったが農大寮の風雅な宿のせいか、豪華な晩さんのせいか朝起きてみたら誰も毛無山の「ケ」の字も出ないで、地底への探検となった次第。しかし楽しい山行? だった。

(国見利夫)

参加者 島田巽、織内信彦、渡辺正臣、沢井政信、近藤緑、菅見愛

子、国見利夫。 図書委員会懇親会

積翠寺温泉から

帯那山へ

図書委員会も新年度に入り、担当理事、および委員の顔振れも変わったため、新旧理事、委員の歓迎迎会を兼ねた懇親会と山行が、七月四・五の両日、山梨県は甲府、要害山の麓の積翠寺町、要害温泉で行われた。越田前担当理事は令息を伴ってご夫婦で参加され、また山梨支部の山村正光会員、石垣政雄会員、他一名の三名の方々がかけつけて下さり、総勢二十名を越す賑やかな会になった。

積翠寺は、武田信玄公生誕の地といわれ、またこの要害温泉は、信玄公愛浴の霊湯といわれるだけあって、当時を彷彿させるような古色蒼然たる大広間で宴会が始まった。「酒豪揃いの委員会」とその名を山岳会内に轟かせた? 図書委員会であるが、山崎委員長が先年、いささか身体をこわされて以来、ややトングダウンの感があるが、それでも山梨支部の方々が差し入れて下さった地酒までも、またたく間に無くなり、なおも場所を宴会場から部屋に移して、山村会員の地元そのままの名調子の説明や、信玄公にまつわる四方山話に夜遅くまで談笑が続いた。しかし明日は帯那山へ登るといこ

とで残念ながらお開きになった。飲み過ぎの疲労のため? か、「明日は雨が降ってくれ」と祈っている人もいたが、明けて五日は、陽こそ出ていぬものの山登りにはまずまずの天気。宿のマイク

ロパスで太良ヶ峠まで上げてもらうことになった。霧にけがる杉や唐松の樹林を眼下にぐんぐん高度を上げる。上方へ行くにつれて道路が立派になるのは驚いた。太良ヶ峠までは完全舗装である。太良ヶ峠から尾根を巻き気味に広い林道を帯那山へ向かう。時々ガスが切れ青空がのぞく。どうやら天気はよい方へ向かっているようである。林道歩きは味気ないが、それでも直径二センチもある大粒の真黄色に熟れたモミジイチゴをドを潤おし、カッコウやウグイスの鳴き声に聞き惚れている内に、一時間余で帯那山頂に達した。広い林道は、ほとんど頂上直下まで達している。

帯那山頂は、広々とした草原であるが、警察無線の中継所跡だというコンクリート造りの白い四角の建物が空家となったままなのは、休憩所や避難場所としては使えても、周囲の景観とはいかにも不釣合で、興ざめであった。しかし、ヒオウギアヤメやフジアザミの花々がぼつぼつ艶をきそい始めており、心を和ませてくれた。

ここから岩瀬、滝川の両委員は、さらに水ガ森から昇仙峽へ向

かうというこで見送った。天気はすっかり回復し、強烈な太陽光が容赦なく降り注ぎ、眼下には甲府盆地が拡がり始めた。むせ返るような草いきれの中を下山し始めた。久しぶりの好天とあって、セミが本番前の音合せをしていた。舗装された車道を歩くのは、足も痛いし退屈なので、古い登山道を探してみたが、仲々みつからない。立派な道路が出来るは旧い静かな山道はすたれるばかりだ。

無事宿に戻ったところで一風呂浴び、蓮池のある庭園の藤棚の下でビールを飲んだ。味は格別であった。帰りには、山村会員の是非にという誘いに甘えて皆でお宅にお邪魔し、銘酒「七賢」の超特級や、奥さん、お嬢さん手作りの料理を御馳走になりながら、陶器のコレクションを拝見したり、六月にNHK第二放送より四回にわたって放送された、近藤信行会員解説による故深田久弥元副会長の「日本百名山」の最終回の放送に聞き入り、図書委員会委員長深田久弥に改めて思いをはせながら、作家深田久弥を偲んだ。

終りに大変お世話になった山村会員始め山梨支部の方、それに楽しい会をアレンジして下さいました河野悠二会員に厚く御礼申し上げます。(伊藤博夫)

△参加者▽ 山村正光、石垣政雄、山崎安治、金坂一郎、近藤信行、

大橋 晋、織田沢美知子、宮下啓三、伊藤博夫、越田和男夫妻、令息、滝川 清、河野悠二、大森久雄、松家 晋、岡沢祐吉、岩瀬皓祐、泉 久恵、平井吉夫、他一名

会務報告

7月理事会
7月6日午後6時30分
本会ルーム

出席者 佐々会長、渡辺副会長、神崎、伊丹、西村、田村、松家、水野、高本、鈴木、高橋、菅沢、岡沢、中村、河村各理事、小原、松丸、村木、大塚各評議員、太田、鳴原監事。

○審議事項
▽長谷川恒男会員のアンデス遠征隊推薦の件(渡辺提案)
▽アマチュア規定に関する件(渡辺報告)

▽会員名簿作成の件(渡辺提案)
▽サマ氏歓迎会(七月二十二日)の件(田村提案)
▽古書購入の扱いについて(松家、西村提案)

▽各委員会報告(省略)
▽委員会々議の件(神崎報告)
七月十九日(日)私学会館にて午前九時から午後五時まで、全体会議、分科会形式で、委員会の横の連絡、JACの今後の行き方などについて話し合いを行う。午後

五時から、新旧役員会の予定

ルーム日誌 (56年6月)

19日(金)	青年懇談会
23日(火)	科学委員会講演会
25日(木)	学生部集会
26日(金)	婦人懇談会
27日(土)	学生部年報編集委員会
29日(月)	フィルム委員会
30日(火)	山岳編集委員会
今月の来室者 579名	
会員移動(6月)	
支部変更	
八〇六二	石原 俊洋(岐阜→東海)
七五五四	花坂 賢治(岩手→)
八七三一	トーマス・ルゴ(55)
九九二二	改姓
八八五七	加藤 淑子→関口(→)

図書受入報告

図書委員会

- 昭和56年4月受入図書(つづき)
- 日本ヒマラヤ協会ザンスカール山群踏査隊「ザンスカール山群中央部踏査報告 1978年8月」1981(中垣淑子氏寄贈)
 - 日本出版会 1981(中村純二氏寄贈)
 - 守屋健郎編「読売報道写真集 1981」読売新聞社 1981(版元寄贈)
 - 内田良平著「ネパール歩く・見る・撮る」東京新聞出版局 1981(版元寄贈)
 - 安倍正道「防長紀行7周防アルハイク・ふるさとのヤブ山80選」マツノ書店 1981(版元寄贈)
 - 芝浦工業大学体育会山岳部編「ベテガリの鐘・宮本明男君日高遭難報告と追悼」1981(編者寄贈)
 - 山岳用品安全基準調査研究委員会「山岳用品(アイスピックル、アイスハンマ)安全基準調査研究報告書(昭和55年度)」1981(金坂一郎氏寄贈)
- 昭和56年5月受入図書
- 向坊隆・中村純二ほか著「山・東京大学公開講座 32」東京

〔あとがき〕

残暑お見舞い申し上げます。昨年、集会委主催のくじ引きでひき当てた高価な外国製の靴をはいて、今夏は白馬大池、朝日岳、蓮華温泉とテントをかっいで歩きました。人は少く、雪は多く、花も多く、星も降るよううで、お花畑に囲まれた幕宮は快適でした。(〇)

昭和五十六年八月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五―四

サンビュウハイツ四番町

発行所 社団 日本山岳会

発行者 佐々保雄

編集代表 岡 祐吉

電話東京(03) 444333

振替口座東京三―四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所

株式会社 技報堂